

【緑地を楽しむ本】

死を食べる—アニマルアイズ・動物の目で環境を見る

宮崎学 著 借成社



出版当時、若いお母さんたちからは「気持ち悪くていや！」と言われた本だ。なにしろこの本には生きもの

の死、というか、死んだ後の映像がいっぱい出てくるのだから。

ある秋の日、著者は死んだキツネを見つける。彼はそこにロボットカメラをしかけ、死んだキツネがどうなっていくか、1時間毎に写真を撮っていた。

すぐにハエが来て卵を産み、2週間後には幼虫のウジが山のようにわき、とてつもなくくさかったとか。すると今度はハクビシンがそのウジを目当てにやってくる。さもないとこの辺りはハエだらけになってしまうのだろうが、自然は食うものと食われるものが出て、それをまた食うものがい

て、うまく調節ができていなのだ。

他にも、バッタやカエル、魚など、多くの死を見つめた後に気づくのは、“死がいのちをつないでいる”ということ。

私たちは切り身にしたりパックに入れたりして生きものの死を見つめないようにしているので、死骸を見ることは少ない。でも、今回緑地の一画に動物の死の痕が残されていたようだ。宮崎さんのようにその後を見る勇気はさすがになくてすぐに埋めてしまったが、きっと地面の下でもバクテリアがしっかり分解してくれていることだろう、それが自然の生業なのだから。

(小川)

※宮崎学さんの写真展「イマドキの野生動物」が10月31日まで東京都写真美術館で行われています。